



左がジュニオールさん(25)。穂高で暮らして10年になる。右が妻ミカさん(23)、下が長女タリッサちゃん(4)、中央が二女サーアラちゃん(2)。

家族とお金の話

日常に生きる

オオシロ ネストル ジュニオールさん 25歳

Oshiro Nestor Junior

マッド・グロツソ・ド・スウ州 → 穂高

ブラジルから来た皆さんは
どんな思いを抱きながら
どんな生活を送っているのでしょうか。
「等身大のあなたを教えてください」
市内で暮らす3人の日常を追いました。

Episódio 1

エピソード
家族と仕事

「男の子でしょう」。市内の産婦人科の医師が2人にそう告げた。妊娠6カ月の検診の日、ジュニオールさんと妻ミカさんの第3子は、初めての男の子であることが、この日分かった。

ジュニオールさんの仕事の終業時間は朝6時。検診には、ほとんど付き添うことができる。

出産の時期に帰国する人が多いことは知っている。それでも、この地で新しい命を迎え入れようと2人は決めた。

家族は日常を生きていくための力。一緒にいれば、どんな苦労も乗り越えられると信じている。

僕の履歴書

ジュニオールさんが生まれたのは、マッド・グロツソ・ド・スウ州ドードス。州の北西部一角には、世界的に有名な大湿原地、パンタナルがある。家は牧場を営んでいて、70畝の敷地には、オランダから移入されたギロラデという茶褐色の牛を放牧している。

近くには、ジャッカという大きな果物のなる木や、魚が釣れる小川もあった。休日は近所の友だちと牧場でサッカーをしたり、パチンコで鳥やネズミを捕って遊んだ。

「働く」ことは、日常のすぐ隣にあった。10歳の時、自転車がほしいと父にねだると、牧場内にある4畝のトウモロコシ畑の管理を任せられた。

放課後、父にトラクターの運転の仕方や土づくりなどを教わり、6カ月すると、仕事が一通りこなせるようになった。すると父は、約束どおり自転車を買ってきてくれた。

その翌年、父は経済的な事情で日本へ出稼ぎに行った。

それ以降、ジュニオールさんは牧場の主要な働き手となった。朝3時に起きて牛の世話をし、午前中は学校、午後は再び牧場に向かうという日が続いた。休日は全くなかった。

3年間、父は家族と離れ、孤独を経験していた。その状況は残された家族もまた、同じだった。

そして、15歳のジュニオールさんは日本に行くことを決意する。

「もう父に出稼ぎはさせない」。



「私もだっ」と、タリッサちゃん。